



K児「汚れるの嫌だからやんなーい」  
～2人の話を聞いて～  
「私、ここに置いていい？」



「200にしよう！」  
「うん、3歳だもんね」「私も3歳だよ」



「汚れたらTシャツに  
着替えれば いいもんね」



緑の葉の上に「お団子、置けた」



「お団子作ろっか、よーし！」と保育者。  
M児のお団子は、崩れてしまう。

CASE 45

3歳児



「3歳だもんね」

協力園(大分市)  
大分大学教育学部  
附属幼稚園

(これまでの経緯)  
幼稚園の入園から2ヶ月が経ちました。ようやく幼稚園の生活にも慣れてきた3歳児。晴れた日の園庭には、シャボン玉遊び、築山の上でのパーベキュ1遊びなど自分の好きな遊びを楽しむ姿が見られるようになってきました。砂場には3歳児が使いやすいスコップやバケツ、じょうろ、水が出るホースも準備されています。

友達が外遊びを楽しむ中、M児は、「葉っぱを取りに行こう。」と保育者を誘います。保育者は、M児に誘われるまま一緒に緑の葉を摘みました。「お団子作りたい」というM児の声に、保育者は「お団子作ろっか、よーし！」とバケツに砂を入れてテーブルまで運びました。

バケツの周りで、M児とA児は、保育者と一緒に濡った砂を両手で握って団子を作り始めました。保育者が握った砂は団子になります。M児は、何度も団子を作りますが、崩れてしまいます。保育者は「どうしたらいいかなあ。」とM児たちにおにぎりを作るように握って見せ、「ギュッギュッとしてみるね。」と言葉もかけました。M児たちは、保育者を真似して握り始めました。

M児が保育者と摘んだ葉が、テーブルに並んでいます。砂を固めて団子を作っているうちに、A児の手には小さな固まりができています。M児は「崩れないのを作りたい」と、砂を足したり、大きさを変えたりしています。保育者「崩れないのがいいんだね。」「どうしたらいいかなあ。」

M児(A児の手をじっと見る。)  
保育者「Aちゃんの崩れないね。」  
M児「(Aの手元をじっと見ながら)『ギュッ』ってしてるから。」  
保育者「あつ、『ギュッ』ってしてるから崩れないのか！」  
保育者がそう言うと、M児は、A児の真似をしてギュッと力を入れて握り始めました。保育者がM児の団子づくりを見守っていると、手の中で団子の形になってきました。

それから保育者は、「先生、そーっと置いてみよう。」と、自分の団子を葉に置きました。団子は崩れません。それを見ていたM児も、何も言わずそっと置きました。M児の団子も崩れることなく葉に置かれました。M児は、笑顔を見せました。保育者は「Mちゃん、お団子置けたね！崩れないね！」と、一緒に喜びます。M児は笑顔になって、何個も作って葉に並べました。

翌週になりました。外遊びが終わりの時間に近づく頃、園庭では、M児はバケツに砂と水を入れ「お団子作りたい」と保育者に伝えました。遊びの時間は残り少なくなっていました。保育者は、M児の思いを受け止め、砂の入ったバケツをM児と一緒にテーブルまで運びました。バケツの周りに数人の子どもたちが集まって来たので保育者はこの場から離れた。

M児とS児がバケツの砂を固め、M児の前には、団子が並んでいます。M児は、先週と同じように力を入れて砂を固めています。途中、砂が付いた手をTシャツで拭いたM児は、その汚れを見て「しまった」というような顔を見ましたが、M児「着替えれば いいもんね。」  
S児「そうだね。」  
M児「もも組だから。」  
S児「一緒のもも組だね。」  
と、話をしながら砂を固め続けます。そして、二人は作ったものをテーブルに並べながら、

S児「ねえ、Mちゃん、何個できた？」  
M児「いっぱい。」「Sちゃんもうまいね。」  
S児「Mちゃんも上手だね。」  
M児「Sちゃんは、何作ってるの？」  
S児「たまご！100個つくろう！」  
M児「いっぱい作るう！」  
S児「200にしよう！」  
M児「うん、3歳だもんね。」  
S児「私も3歳だよ。」

と、話しながらバケツの砂を手に取りテーブルに並べていきます。そうしているうちに、「ピカピカやさんがオープンしているよ。」と、保育者が片付けの時間が始まっていることを知らせます。団子やたまごづくりを続けている二人に気付いたK児が「ピカピカやさんだよ。」と知らせに来ます。

S児「私、Mちゃんとたまご作ってるの。Kちゃん、たまご作る？」  
K児「私、汚れるの嫌だからやんなーい。」  
M児「汚れたら洗ったらいよ。」  
S児「自分で着替えられるよね。」「お母さんに洗ってもらえばいいよ。」  
M児「一緒にしよう。」

二人の話を聞いていたK児も団子やたまごづくりに加わります。そして、「私、ここに置いていい？」と、自分が作った団子をM児の団子とS児のたまごの間に置き、暫くの間、三人の団子、たまごづくりが続きました。

保育者は、M児が友達と団子やたまごづくりを楽しんでいる様子を見守りました。バケツの砂がなくなると、「もうおしまいにしない？」と、三人は遊びを止めて部屋に入り、自分で着替えを始まりました。

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿「10の姿」

自立心	言葉による伝え合い	思考力の芽生え
社会生活との関わり		自然との関わり

身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならぬことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動できるようになる。

事例に見られる10の姿の育ち  
自立心  
砂で団子を作りたいが、簡単にはできないM児に、保育者は「ギュッギュッ」と声を出して強く握って見せたり、友達に握る様子に気付かせたりする。M児は、保育者や友達に真似をして砂を強く握り込み、手の中には崩れない団子ができる。さらに、葉にそーっと団子を置く保育者の真似をしてM児も置く。M児は崩れず葉に乗る。当初の願いも叶い、保育者から認められることで嬉しさいっぱいの笑顔を見せる。  
自分で団子を作れるようになったM児は自信をもち、翌週にもS児と団子作りを楽しむ。シャツが汚れても着替えればよい、と見通しを持って遊ぶ積極的な姿も見られる。  
身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、信頼する先生に支えられながら、物事を最後まで行う体験を積み重ねるM児の姿は、自分の力でやろうとする気持ちをもったり、やり遂げた満足感を味わったりするようになる5歳児の姿につながると考えられる。

事例に見られる10の姿の育ち  
言葉による伝え合い  
二人の会話、「もも組だから。」「一緒のもも組だね。」には、シャツが汚れたら着替えればよい。私たちが自分で着替えが出来るもも組だよ。ねと、3歳も組になった自信や自己決定に似た感情を楽しむ様子が見られる。  
また、「たまご100個つくろう。」「200にしよう。」と、たくさんのお団子が作れるようになった喜びや、もも作りたいという共通の願いを言葉のやりとりを通して楽しみながら心を通わせている姿が見られる。  
この場面に「一緒の」「私も」とS児の言葉があり、「Mちゃんと一緒だよ」と、友達であることを嬉しがる伝え合いも感じられる。二人の会話は、この後K児にも伝わり、遊びの輪を広げることになる。  
安心して伸び伸びと自己発揮できる人間関係の中で、自分の経験や考えを大好きな先生や友達に「伝えたい」と感じる体験の積み重ねは、自分の気持ちや思いを伝え、先生や友達が話を聞いてくれる中で、言葉のやり取りの楽しさを感じ、そのやり取りを通して、相手の話を聞いて理解したり、共感したりするようになっていく5歳児の姿につながると思われる。

自立心  
保育者の援助と環境構成のポイント

- 遊びの場の環境構成(砂場)  
・子どもの年齢や数に応じたバケツやスコップ、作業台、ホース、たらい、自然物(葉など)
- 団子を作る過程での保育者の援助  
・して見せる(団子の作り方、握る強さ)  
・共同作業(砂を運ぶ、友達の仕方に着目)  
・目的が達成した時の賞賛する言葉かけ
- 安心して遊びを進められる保育者の見守りや遊びの時間の保障
- 同じ遊びを楽しんだり、気持ちが通い合ったりする友達の存在